

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 8 月 8 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530855

研究課題名(和文) 青少年のリスク認知における過小視現象の検討：安全教育へ向けた基礎的研究として

研究課題名(英文) Examining the underestimation phenomena on risk perception in youth: As a basic study for safety and health education in school

研究代表者

竹西 亜古 (Takenishi, Ako)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：20289010

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、青少年の問題行動の生起過程にリスク心理学の知見を応用し安全教育に資することを目的とした。高校生7622人、中学生2657人を対象とした調査データの解析結果では、高校生のリスク認知構造が行為の倫理性や違法性による3次元をもっていたのに対し、中学生のリスク認知構造にはそのような分化がみられなかった。またリスク過小視を促進する要因として、高校生では認知欲求の低さ(思考を嫌う程度)、中学生ではそれに加えて地域や家庭の規範意識の低さが認められた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the psychological processes of underestimation phenomena on risk perception of problem behaviors in youth, and to contribute to safety and health education in school. Employing multivariate analyses revealed that the risk perception in high school students (n=7622) consisted of 3 dimensions concerning ethics and illegality, while the one in junior high school students (n=2657) not consisted of such dimensions. The analyses also indicated that low need-for-cognition was the primary factor of the underestimation. As for the junior high school students, their communities' and homes' norms also influenced the underestimation.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：リスク認知 問題行動 青少年 安全教育 生徒指導

1. 研究開始当初の背景

青少年の問題行動が後を絶たず、時には違法性の強い行動にまで発展する現状がみられる。学校教育現場では、安全教育の充実や予防的・開発的生徒指導の必要性が強調されているが、子どもたちに対する有効な方策は確定されていない。その一因に、問題行動に至る彼らの心理過程が明らかにされていないことが挙げられる。さらに、その心理過程を、問題行動を引き起こした子どもだけに限って見るのではなく、一般的青少年の心理過程として明らかにすることが必要だと考えられる。そこで、青少年の違法的行為や反規範的行為に対する危険度の認知、すなわち「リスク認知」がどのような状態であるかを明らかにし、影響する要因を検討することによって、過小視を防ぎ、適切なリスク認知を促進する方法を考え得ると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、青少年の問題行動の生起過程にリスク心理学の知見を応用し、リスク過小視に至る心理過程を明らかにすることである。本研究では、リスク過小視が行為の結果評価の不適切さ(結果を正当化して認知したり、影響を予想できないこと)によって起きるとの仮説を設定し、高校生ならびに中学生を対象とした調査データの解析によって、検証することを第1の目的とした。さらに、結果評価は、青少年の心理要因および環境要因によって影響されると考え、それらの影響の大きさを比較検討し、適切な結果評価、ひいてはリスク認知の促進につながる要因を明らかにすることを第2の目的とした。

3. 研究の方法

対象校および回収数

対象校は、H県H地域にある県立高等学校6校。対象校には普通科、商業科、工業科、総合学科を含み、学校ごとの大学進学率(4年制、短期大学を含む)は、ほぼ100%から10%までばらつきがあった。また、各校ごとの生徒指導事案の件数にもばらつきがあり、年間数件の学校から100件近くを数える学校までであった。調査は、平成23年度、24年度の2回、対象6校の全在学学生を対象に実施され、計7622の件のデータが得られた。

調査票の構成

調査票は、1)リスク認知の特徴を測定する項目群、2)リスク過小視に影響すると考えられる心理要因を測定する項目群で構成された。

1) リスク認知の特徴を測定する項目群

ここでは、問題行動に対するリスク認知、問題行動への興味関心、問題行動をとった場

合に生じる結果に対する評価(結果評価)の各測定概念を測定する項目群が設定された。回答の対象となる「問題行動」は、対象校の生徒指導担当教員への面接調査によって選定されたものである。具体的には、学校裏サイトの利用、薬物使用、万引、やる気なくただただ過ごす、授業をサボる、教師への暴言、Webでの自己情報公開、おどし、喫煙、考査での不正行為、重大決定における他者依存(人まかせ)、飲酒、パチンコ、無免許バイク運転、器物破損、無断夜間アルバイト、退学の17行動が問題行動として設定された。

リスク認知測定項目: リスク認知をたずねる質問では、上の17を行動文で提示(たとえば「学校裏サイトを見たり、書き込んだりする」「病気治療でない”クスリ”(麻薬や覚醒剤)を使う」「コンビニやスーパーなどで万引をする」「なにもやる気をださず、ただただと時間を過ごす」など)し、以下の教示のもと「危険-危険でない」を係留とする5段階尺度上に回答を求めた。

問題行動への興味関心測定項目: リスク認知測定で用いた17の行動文を用いて、以下の教示のもと、「したい・してみたいと常に思っている」「日頃から興味・関心がある」「いつもではないが、時々、興味・関心をもつことがある」「したら面白いかもしれない」「興味・関心がないし、思ったこともない」の5段階尺度で回答を求めた。

結果評価測定項目: まず17の行動文のうち7つを選んで提示した。その上で当該行動によって生じる結果を記述した10個の文のそれぞれについて「そう思う-そう思わない」を係留とする5段階尺度を設定した。

選択された行動文: 学校裏サイトの利用、万引、ただただ過ごす、教師への暴言、Webでの自己情報公開、喫煙、無免許バイク運転

結果の記述文:

- ・自分の行動は親や先生に知られない、ばれない
- ・たとえ人に知られても、たいしたことにはならない
- ・行動の楽しさに満足したり、快感をおぼえたりする
- ・仲間から認められたり、優越感を感じたりする
- ・自分自身の健康に害が出る
- ・親や家族との関係が悪くなる
- ・まわりの人から悪い評判を受ける
- ・学校に居られなくなる
- ・今までとは別の人間になってしまう
- ・自分の将来がそれまでとは違う方向に進む

2) 心理要因を測定する項目群

リスク過少視に影響する心理要因として、高校生の認知欲求、関係自尊心、対人葛藤耐性、学校所属感および部活意欲の5つを設定した。認知欲求はリスク過少視におよぼす認知的要因であり、関係自尊心と対人葛藤耐性は関係的要因である。学校所属感と部活意欲は、両者に関わる要因と捉えられるが、リスク過少視過程における学校の影響を検討するために、導入された。なお認知欲求は「考えることへの嗜好性、考えようとする動機の高さ」を測定する概念であるが、ここでは、「考えることがきらいであり、考えたくない」という逆方向から捉えて「低認知欲求」として概念化した。以下、それぞれの要因の項目例を挙げる。

低認知欲求:「どんなことでも”考えること”は、あまりおもしろくない」「一度覚えてしまえば、あまり考えなくてもよい課題が好きだ」など5項目。

関係自尊心:「わたしは、まわりの人との関係で、幸せを感じることがある」「わたしは、まわりの人との関係で、自分自身をなくてはならない存在だと思う」など6項目。

対人葛藤耐性:「友達からは自分の批判や欠点を聞きたくない」「友達から嫌われないようにいつも気を使っている」など9項目

学校所属感:「この学校の一員であることは、自分にとって重要だ」「この学校での生活が楽しい」など5項目

部活意欲:(所属部活動を回答した上で)「その部活に熱心に取り組んでいる」「部活は自分にとって重要だ」など4項目

以上の項目群は、「日常生活でのあなた自身の様子や気持ち(あるいは、日頃の友人関係、または、この学校に対する気持ち)を教えてください」との教示のもと、「当てはまる - 当てはまらない」を係留とする5段階尺度上に回答を求めた。

実施手続き

今回の調査で最も配慮した点は、回答のプライバシー保護であった。倫理的な権上の配慮は当然ながら、今回の質問項目の多くは、回答者である生徒にとって答えにくいものであると予想された。測定対象となった行動文には、刑法上処罰対象となるものも含まれており、社会的望ましさによる反応歪曲が予想された。そこで、本調査では、学校関係者や保護者に回答が見られないこと、つまり「回答の秘密」が守られることを教示文において繰り返すとともに、実際に「秘密が守られる手続き」を用い、生徒に実感させる手法を用いた。

調査票の回収にあたり、封入用テープのついた封筒を用意した。回答後すぐに回答者で

ある生徒自身の手で、封筒に調査票を入れ密封させた。その上で、教師ではなく、生徒の代表者がクラス全員の封筒を集め、所定の位置に設定された回収箱に投入した。また、封筒には「この封筒は、あなたの回答の秘密を守るためのものです」とのタイトルに続けて、封筒は研究者の手元につくまで開封されないことがない旨、説明が記されてあった。この手法を用いて、学校ごとに全校生徒一斉実施を行った。

4. 研究成果

問題行動に対する高校生のリスク認知構造の検討

高校生が17の問題行動のリスクをどのように捉えているかを明らかにするために、リスク認知尺度を用いて探索的因子分析を実行した。最尤法により3因子が抽出された(説明率54.4%)。プロマックス回転後のパターン行列を表1に示す。カットオフ基準0.342で、「公開(Webでの自己情報公開)」と「バイク(無免許バイク)」運転の2項目を除く全項目が、いずれかの因子に負荷した。公開はいずれの因子にも高く負荷せず、バイクは第1と第3因子の両方に高負荷していた。

第1因子には「クスリ(薬物使用)」「万引」「おどして(強要・恐喝)」「不正(考査での不正行為)」「壊す(器物破損)」5項目が、第3因子には「たばこ(喫煙)」「酒(飲酒)」「パチンコ」「夜間(無断夜間アルバイト)」の4項目が高く負荷していた。第1、第3因子ともに、刑法違反・法令違反の行動(不正は学校社会における重大な法令違反といえる)が負荷しているが、第2因子に負荷した行動は、高校生には法違反であるが年齢基準をクリアすれば違反とならない行為であり、“絶対的に悪い行為・倫理的に許されない行為”ではない。高校生にとっては数年後に合法化され解禁される行為であり、現時点で行うかどうかは個人的判断の範疇と捉えられうるものである。一方、第1因子に負荷した行動は、年齢にかかわらず法違反となるものであり、“社会が許していない悪行為”であり、それゆえに社会的制裁を伴うものである(考査における不正も学校社会においては絶対悪であり、制裁の対象となる)。このことから、第1因子は「社会的制裁を伴う行動へのリスク認知(社会制裁リスク)」であり、第2因子は「個人行動の範疇に入る違反へのリスク認知(個人行動リスク)」と名付けることができる。

第2因子には、「裏サイト(学校裏サイトの利用)」「だらだら(やる気なくだらだら過ごす)」「サボる(授業をサボる)」「暴言(教師への暴言)」「人まかせ(重大決定における他者依存)」「退学」の6項目が高く負荷した。これらの行動はいずれも、学校を含む日々の生活における態度や行動であり、このことから第2因子は「自己の生活態度へのリスク認知

(生活態度リスク)」であると解釈できる。

表1 リスク認知の構造(高校生)

	因子		
	1	2	3
r裏サイト	.281	.342	.020
rクスリ	.945	-.082	-.147
r万引	.811	.037	.009
rだらだら	-.114	.737	-.029
rサ'る	.037	.759	.087
r暴言	.166	.539	.174
r公開	.071	.264	.201
rおどして	.545	.224	.088
rたばこ	.365	-.037	.556
r不正	.487	.148	.253
r人まかせ	.141	.418	.008
r酒	-.102	.041	.878
rパチンコ	-.007	.035	.784
rバイク	.462	-.052	.475
r壊す	.430	.167	.296
r夜間	-.006	.271	.568
r退学	.072	.384	.167
	社会制裁リスク	生活態度リスク	個人行動リスク

問題行動への興味・関心構造の検討

17の問題行動に対する興味関心の構造を検討するため、興味関心の測定尺度を用いて最尤法による探索的因子分析を行ったところ3因子が抽出された(説明率52.5%)。プロマックス回転後のパターン行列を表2に示す。

表2 問題行動への興味関心(高校生)

	因子		
	1	2	3
m裏サイト	.613	-.149	.219
mクスリ	.767	.032	-.071
m万引	.656	.160	-.009
mだらだら	-.026	-.030	.725
mサ'る	.036	.178	.668
m暴言	.345	.151	.366
m公開	.122	.103	.328
mおどして	.768	.031	.047
mたばこ	.384	.520	-.081
m不正	.650	.166	.023
m人まかせ	.335	-.056	.328
m酒	-.141	.699	.232
mパチンコ	.215	.610	-.043
mバイク	.277	.606	-.034
m壊す	.667	.139	.049
m夜間	.033	.511	.274
m退学	.365	.218	.192
	受社会制裁行動	個人問題行動	生活態度問題行動

第1因子には「裏サイト」「クスリ」「万引」

「おどして」「不正」「壊す」が高く負荷していた。これらの項目は「裏サイト」以外、リスク認知構造の社会制裁リスク認知の次元と同じであり、社会的に許されず、制裁を招く行動である。従って、第1因子は「社会的制裁を受ける行動への興味関心(受制裁行動への興味)」の次元であるといえよう。第2因子には「たばこ」「酒」「パチンコ」「バイク」「夜間」が高く負荷しており、リスク認知の個人行動リスク次元に相当するものと考えられる。そこで、第2因子を「個人問題行動への興味」と名付ける。また第3因子には「だらだら」と「さぼる」の2項目が負荷したことから、「生活態度上の問題行動への興味」と呼ぶ。

結果評価の検討

結果評価尺度(行為の結果を記述した10の文に対して、そのようなことが自分自身の身に起きたり、生じたりすると思うかを評価)を、7つの問題行動ごとに探索的因子分析(最尤法プロマックス回転)にかけた。その結果、7行動いずれにおいても、2因子構造が認められた。表3に例として「たばこ」の結果を示す。

表3 結果評価(喫煙)(高校生)

	因子	
	1	2
ctばれない	.158	.534
ctならない	.268	.558
ct快感	-.080	.899
ct優越感	-.144	.873
ct健康	.489	-.083
ct関係	.783	.033
ct評判	.765	.027
ct学校	.781	.028
ct別の	.872	.009
ct将来	.869	.026
	将来予測	一時的快楽

リスク過少視の心理過程の検討

1.合成変数の作成

上述の分析結果を受けて、合成変数を新たに作成した。リスク認知では、得られた3因子ごとに、負荷した項目の数値を合計し「社会的制裁リスク認知」「個人行動リスク認知」「生活態度リスク認知」の3変数を作成した。合計に当たっては、各項目の数値が大きくなるほど「リスクを認知している(すなわち過少視が起きていない)」、小さくなるほど「リスクを認知していない(過少視が起きている)」ようにした。

問題行動への興味関心では、「受社会制裁行動」「個人問題行動」「生活態度問題行動」の3変数が作成された。ここでは、値が大きくなるほど、当該の問題行動に興味関心を持っている方向に合計された。

結果評価については、7つの対象行動すべてにおいて同様の構造が見られたが、「健康」の項目の負荷量が相対的に低く、対象行動間でばらつきが大きかった。そこで、「健康」を除いて第1因子に負荷した項目で合計し、新変数「将来予測力」を作成した。この変数作成にあたっては、値が大きくなるほど将来予測力が高くなる形で合計した。これにそるる形で、一時的快楽の因子についても、一時的快楽傾向が低いほど値が高くなる変数「一時的快楽の抑制」を作成した。

2. リスク認知と結果評価

結果評価が適切であるほど、すなわち行為による一時的な快楽を求めることが少なく、また、行為が自己の将来にもたらす影響を予測できるほど、問題校へのリスク認知が促進されるという仮説を検討した。新たに作成した変数「社会的制裁リスク認知」「個人行動リスク認知」「生活態度リスク認知」のそれぞれを目的変数（従属変数）に、結果評価の適切さに関わる2側面「一時的快楽の抑制」と「将来予測力」を説明変数（独立変数）にした重回帰分析を行った。結果を表4に示す。

分析の結果、いずれのリスク認知の次元においても、一時的快楽を抑制できるほどリスク認知が高まること、また将来予測力があるほどリスク認知が高まること示された。一時的快楽の抑制と将来予測力は、いずれも高校生の問題行動に対するリスク認知を促進し、過小視現象を減らすことが明らかになった。

表4 リスク認知を促進する要因(高校生)

目的変数	説明変数		adjR2	p
	g一時的快楽の抑制	g将来予測力		
社会制裁リスク	β	.284	.273	0.199 0.000
	p	.000	.000	
個人行動リスク	β	.304	.350	0.273 0.000
	p	.000	.000	
生活態度リスク	β	.279	.373	0.273 0.000
	p	.000	.000	

表5 問題行動への興味関心に影響する要因(高校生)

目的変数	説明変数		adjR2	p
	g一時的快楽の抑制	g将来予測力		
受社会制裁行動	β	-.467	.008	0.216 0.000
	p	.000	.524	
個人問題行動	β	-.465	-.111	0.256 0.000
	p	.000	.000	

これら2つの説明変数による重回帰式では、20%~27%の説明率が得られた。説明変数が2つと数少ないこと、また問題行動を見る高校生の見方に未知の誤差変数の影響が相当分想定しうることを考慮すると、今回得られた説明率（自由度調節済み重相関係数値）は一定の説得力をもつものといえよう。

各重回帰式の標準化係数値（ β ）は0.28~0.37であり、強い影響力とはいえないが、一時的快楽の抑制と将来予測力は、リスク認知を促進する明らかな要因であることが示された。特に、「喫煙」「飲酒」など個人行動に対するリスク認知は、一時的快楽の抑制がなされるほど促進し（ $\beta=0.304$ ）「ただだする」「暴言を吐く」などの生活態度に居合するリスク認知は、将来予測力で高められること（ $\beta=0.373$ ）ことが明示された。

成果のまとめ

- ・ 青少年の問題行動に対するリスク認知構造、興味関心の心理的構造を明らかにした。またその構造には発達的な差が見られることを示した。
- ・ 結果評価の不適切さに2側面のあることを示した。ひとつは行為に対する一時的快楽嗜好であり、もうひとつは行為の影響に関する予測力の低さであった。
- ・ 結果評価の各側面がリスク過小視を促進すること、ならびに問題行動への興味・関心を高めることが明らかにされた。
- ・ 結果評価の不適切さに影響する心理的、環境的要因を明らかにした。高校生の場合は、発覚感のなさや一時的快楽の重視といった行為の正当化に影響する要因として認知欲求の低さが、将来予測力の影響因として対人葛藤耐性や学校所属感が同定された。

本研究では、これらの作業を通じて得られた結果を、研究協力校を中心に積極的に学校教育現場に還元してきた。本研究では、当初の研究目的に加えて、開発的・予防的生徒指導を考える上で、青少年のリスク過小視現象に基づくアプローチを提案できたといえよう。

5. 主な発表論文等

〔その他〕対象校への分析結果報告書の還元

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹西 亜古 (Takenishi Ako)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：20289010